

# 札幌医科大学 ラグビー部



函館市医師会  
市立函館病院

武山 佳洋

新年あけましておめでとうございます。4回目の年男ということで寄稿させていただきます。

昨年はラグビーワールドカップ（W杯）が開催され、日本代表のベスト8躍進に日本中が熱狂したのは記憶に新しい。今回、大学時代に関わりその後の半生に多大な影響を及ぼしている「ラグビー部」について書いてみたい。

幼少時から運動が苦手な高校までインドア文化系だったが、大学では体育会系の部活に挑戦しようと考えた。その頃は第一次ラグビーブームで、テレビで明治大学のウイング吉田義人選手を観てあこがれた。大学入学後にラグビー部の門をたたいたことで、その後の人生や価値観が大きく変わった。

ラグビー部は第1回W杯が開催された昭和62年、進学ロビー（通称進ロビ）にたむろしていた学生の集まりから自然発生的に創部されたらしい。ラグビー経験者は2名程度で、他は野球、ゴルフ、スキー、吹奏楽、帰宅部など多彩なメンバーが集められた。最初はルールが分からず、試合での初トライはインゴールでアメフトのようにボールを地面に叩きつけ、ノックオンの反則に終わったという逸話もあった。私が入部した平成2年は創部4年目で、先輩方は皆いかつて医学生に見えない集団だった。

練習はきつく、毎日ついて行くのに必死だった。基本的な動きを教わった直後、入部2週間くらいで試合に出された。創部者から「球持ったら前に突っ込め」「球は前に投げるな」「あとは気合だ!」と言われた。訳が分からず怖かったが、夢中でボールを追いかけ、楽しくもあった。

バックスの華麗な走りにあこがれて入部したが、鈍足でセンスもなくフォワードに配属され、スクラム最前列のプロップに落ち着いた。どんな人にもポジションが当たるのがラグビーの長所であり、その後は筋トレに明け暮れた。スクラムはただの押しあいに見えるかもしれないが、組んだ者にしかわからない難しさと奥深さがある。自分で押すよりも正しい姿勢で組むことが大事で、そうすれば仲間が後ろから押してくれる。気付いたのは5年生になってからで、選手としては芽が出ず引退となった。

練習後の飲み会も容赦なかった。「稽古だ!」と言われながら大盛りメニューを食べ、ビールが進まない。「泡が死んでるぞ」と言われ飲み干し、酎ハイは注文禁止（薄めた酒は気合が足らん）であった。理不尽のオンパレードで、ここには書けない武勇伝

も多数ある。今なら〇〇ハラスメントと言われそうだが、陰湿ないじめや暴力等はなく、不思議な一体感があり楽しかった。

当初は試合で負け続けていたが、部員が増えて強豪校の経験者も入り、だんだん強くなった。東日本医科学学生体育大会（東医体）では4年時（平成5年）に念願の初勝利を挙げ、ベスト8に進出した。6年時（平成7年）には惜しくもメダルは逃したが4位に入った。

卒業後は離れてしまったが、下手糞でもラグビーを経験したことは一生の財産である。One for all, all for one やノーサイドといったラグビーの精神はもちろん、体育会系のしきたりや粘り強さ、チャレンジ精神を学び、これらは社会に出てから大いに役立った。スクラムの組み方も、現在携わっている救命救急センターの運営に通じるところが多いと思う。泥だらけで一緒に楯円球を追いかけた仲間には固い絆があり、さまざまな場面で助けられることが多い。

私から見て滅茶苦茶・理不尽トップ2だった先輩は、現在お二人とも札幌市内の医療法人で理事長を務めておられる。理不尽に見えた言動の裏には愛情があり、人を惹きつける魅力や経済合理性も備わっていたということなのであろう。

昨年のW杯札幌開催では、医務スタッフの大半をラグビー部OBが務めた。私も観客救護室で微力ながらお手伝いでき、光栄であった。札幌開催のさなかに創部者の還暦祝いが催され、部員とOB約50名が集まった。皆カンタベリーを着て、あちこちでラグビーについて熱く語っている。現役部員の身体を張った余興も健在である。みんなラグビーが大好きなんだと改めて感じ、嬉しかった。

創部30年を経てOBは100名を超えたが、現在のラグビー部は部員減に悩んでいる。今回のブーム再燃を機に盛り返し、さらに歴史を刻んでもらいたい。このままラグビー人気が続いて、存命中にもう一度、日本でW杯が開催されるといいなあ。決勝は日本対オールブラックスだと最高だ。その時は観戦か医務どっちがいいかな…などと夢見ている。



創部者の還暦祝いにて